Ⅰ　研究主題

学ぶ意欲を高め、確かな学力の向上を目指す授業の創造

《目指す児童生徒像》

「分かる」「できる」喜びを実感するとともに、学びを生活に生かそうとする児童生徒

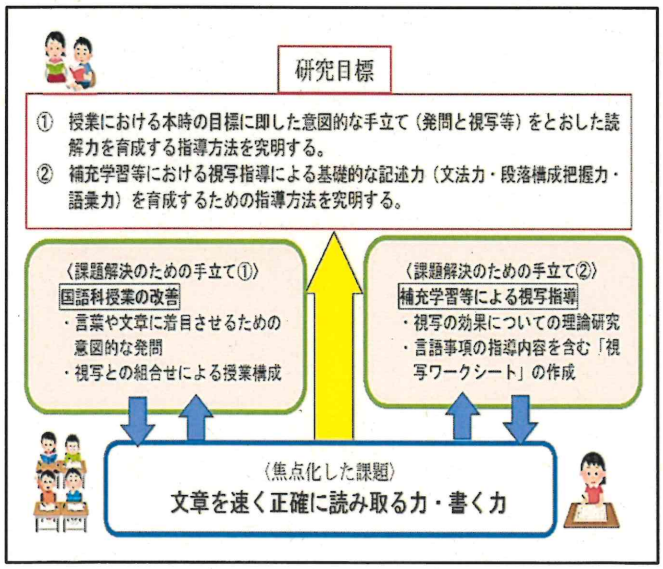
Ⅱ　主題設定の理由

情報化やグローバル化、人工知能の進化といった社会的変化は加速度を増し、今後の社会は一層高度化、複雑化することが予想されている。このような時代の中、学校教育には、児童生徒に対し、主体的に学びに向かい、粘り強く問題を解決しようとする力や、対話や議論などの学び合いを通じて自分の考えを伝えたり、相手の考えを理解して、自分の考えを広げたり深めたりしていくことができる力を育成することが求められている。

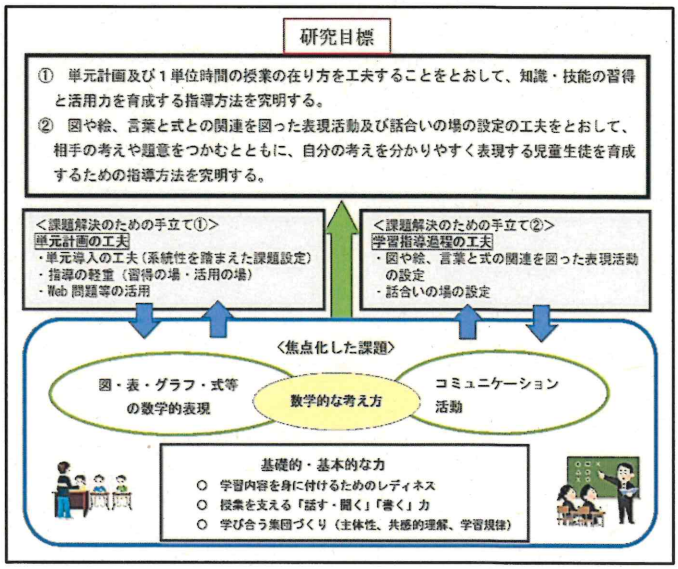
新学習指導要領においても、「育成すべき資質・能力の三つの柱」の一つに「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」が挙げられている。この「学びに向かう力」は、学校教育法第 30 条第２項に規定される「主体的に学習に取り組む態度」を含意しており、「学ぶ意欲」と大きく関連するものととらえることができる。つまり、児童生徒が何のために学ぶのかといった、学ぶことへの意義や必要感を存分に感じ、「学ぶ意欲（知的好奇心、向上心）」を高めながら学習に向かっていくことは、これからの新しい時代に必要となる資質・能力である。

そこで、本研究においては、５か年計画で「学ぶ意欲」と「確かな学力」をキーワードに、授業改善や学習指導の在り方を究明する研究に取り組んでいる。２年目となる昨年度は、一単位時間における課題設定の工夫や肯定的評価活動に関する研究と検証を行い、児童生徒一人一人に自分の考えをもたせ、有能感や自己決定感を感じさせるなどの成果を収めることができた。一方で、単元全体を見通した計画的な実践や一人一人の考えをさらに深めていくための研究が課題として残った。

これらのことを踏まえ、今年度は「国語科教育研究班」「算数・数学科教育研究班」の２班体制で、単元全体を見通した計画的な授業実践や一人一人の考えをさらに深めさせるという課題の解決に向け、研究を進めることにした。そのためのアプローチとして、読み取る力、書く力、話す・書く力などの育成を図ろうと考えた。これらをとおして、主題に迫るとともに、都城市の学校教育ビジョンにつなげようと考えた。



【国語科教育研究班　研究構想図】



【算数・数学科教育研究班　研究構想図】

Ⅲ　国語科教育研究班研究の実際

1　理論的な研究の実際

研究内容１　読解力向上のための発問と視写との組合せ

(1) 読解力向上について

読解力とは、「表現された意図や内容を速く、正確に読み取り、自分の知識や経験と関連づけながら考えを整理する力」である。国語科の授業においては、本時の目標に即して、児童生徒に読み取らせたいことを明確にし、言葉を根拠に正確に読み取らせることが重要である。そのために、授業者の意図的な発問にもとづいた視写の活動によって、読む活動と書く活動を反復させながら、同時に行うことが効果的ではないかと考えた。

(2) 発問と視写との組合せについて

発問とは、授業者がねらいに沿って児童生徒に文章に立ち戻らせ、説明する内容を問いかける形にしたものである。

また、視写とは、素材を視覚的に認知しながら書き写す活動である。

よい発問とは、「考えたい」「話し合いたい」というように児童生徒を能動的に学習に向かわせ、正確で深い読み取りができるようにする発問のことである。つまり、わかりきっていることを問うのではなく、新たな発見や気付きが得られるような発問でなくてはいけない。叙述に着目させるような「発問」によって、「視写」をとおして児童生徒が、より確かに読み、内容について考え、新たな気付きを得ることができると考えた。

【発問と視写との組合せのパターン例】

発問の前に視写をさせる	発問をしてから視写をさせる	学習のまとめとして視写をさせる
【注文の多い料理店】 指示：最初に出てくる、「戸」の言葉を視写しましょう。 **発問：視写した部分の中で、おかしいな、と思うところを見つけましょう。** ※低・中学年では、ほとんどの文を視写して考えさせることが有効である。	【テレビとの付き合い方】 **発問：作者が述べている「白い部分」とはどのような意味でしょうか。** 指示:その言葉が書いてある第５段落の一部を視写して、図の意味を考えてみましょう。	【テレビとの付き合い方】 指示：結論部分を視写しましょう。 **発問：筆者の考えについて、賛成か、反対か、立場を決めて、自分の考えをまとめましょう。**

発問の前後に、「黙読」「音読」等の活動に「視写」という活動を加える。そうすることで「書きながら読む」ことができ、「黙読」「音読」のみよりも言葉、もしくは、その関係性に着目させることができる。また、学習意欲や習熟をより向上させたい児童生徒に、学習参加を促す効果もあるだろうと考える。

研究内容２　記述力を高める補充的な視写の指導について

(1) 視写の活動

本研究所は、視写の活動について以下のようにとらえている。

視写には３つの目的がある。

→「読むこと」に位置付けられる、素材の理解・鑑賞をより確かで豊かなものにする目的

→「書くこと」に位置付けられる、素材のもつ表現性を身に付けさせる目的

→「書写」に位置付けられる、文字を正しく整えて書く目的･･･研究内容には含まれない。

(2) 視写の効果

視写活動を「書きながら読む」活動として、書写・作文と区別して位置付けた青木幹勇氏は、以下のように述べている。

> 文章を書き写す活動は、一見機械的な作業のように見えますが、意識の活動というものは、けっしてそんなに単純なものではありません。子どもたちは、文章を書写することによって、ただ文字を右から左へ書き写すというだけでなく、書きながら、文章を読むようになってきます。音読や、黙読でも読むことは読んでいたのですが、読む力の弱い子どもは、ともすると、文章の上すべりの読みしかない、文字は読んでいても、文章を読み取っていない空白の読みをしていることが多いのです。
>
> 「青木幹勇授業技術集成２　書きながら読む」　青木幹勇　１９８９年

国語教育研究班では、この青木氏の指摘を研究の基本的な方向性をしてとらえている。また、視写には様々な効果があり、その効果を次のように整理した。

【視写の取組によって期待される効果】

視写の効果

効果１　読解力の育成

「書きながら読む」ことにより、文の言葉一つ一つに着目し、正確に読み取ることができる。

効果２　考えの形成

言葉に着目して、じっくりと短い文を「書きながら読む」ことで、疑問や感想、意見など自分の考えをもつことにつながる。

効果３　記述力の育成

記述力は、文法力・段落構成理解力・語彙力ととらえる。例文を参考にして書くことを繰り返すことで、文法の正しい使い方を知り、自らの表現に生かすことや語彙の増加につながる。

効果４　集中力等の向上

一つのことに集中して取り組むことにより、集中力や忍耐力が身に付き、達成感を味わうことにつながる。

(3) 記述力を高める「視写ワークシート集」の作成

これまで述べてきた視写の効果を検証するために、「視写ワークシート集」を作成し、市内の小中学校に、紙媒体とデータ形式で配付した。

この視写ワークシート集は、主に補充学習等で用いることを想定し、読解力・記述力の向上につながる文法力・段落構成能力の向上や集中力等の向上を目的としている。

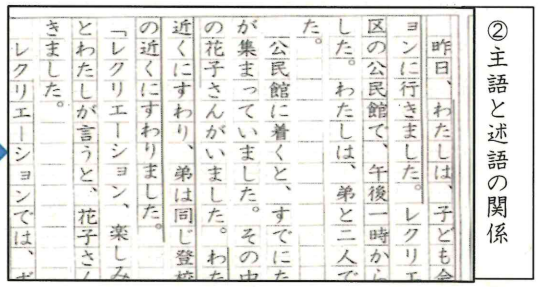
ワークシート集の内容は、右にあるように１０項目である。この項目は、新学習指導要領国語科「知識及び技能」の「書くこと」「文や文章」の指導事項を参考にした。

【視写ワークシートの項目】
① 言葉のまとまり（文節）
② 主語と述語の関係
（単文、重文、複文）
③ 修飾と被修飾の関係
④ 指示語の役割
⑤ 接続語の役割
⑥ 文の書き出しの工夫
⑦ 指示語・接続語
⑧ 呼応の副詞「全然」について
⑨ 助詞「が」「の」について
⑩ 長文視写（天声人語等）

なお、「ワークシートの使い方」「指導の手引き」を添付した。例えば、②の主語と述語の関係については、以下のような手引きを掲載し、活用しやすくした。

② 主語と述語の関係
単文、重文、複文に分類できます。例文では、「わたしは～行きました」「私は、～すわり、弟は、～すわりました」「ラケットの上に乗せたボールを、わたしは運びました」といった主述の関係を示しています。文の構成をとらえるための資料です。

【「指導の手引き」に示した説明】


昨日、わたしは、子ども会
ョンに行きました。レクリエ
区の公民館で、午後一時から
した。わたしは、弟と二人で
た。
公民館に着くと、すでにた
が集まっていました。その中
の花子さんがいました。わた
近くにすわり、弟は同じ登校
の近くにすわりました。
「レクリエーション、楽しみ
とわたしが言うと、花子さん
きました。
レクリエーションでは、ぜ

②主語と述語の関係

【「視写ワークシート集」の抜粋】

2 研究授業の実際

第１回 検証授業 小学校 第５学年「わたしたちとメディアとの関わりについて考えよう」
教材名「テレビとの付き合い方」 授業者 高城小学校 教諭 井上 岳

（1） 叙述に目を向けさせる発問の工夫

キーワード「白い部分」に着目させ、発問を組み立て、叙述されている文言を読み取らせるようにした。そのために、「『白い部分』を忘れないようにとはどういう意味か」「『白い部分』とは何のことか」と発問を行った。

児童の姿

これらの発問を行ったことで、「白い部分」と「黒い部分」の説明が書かれている段落に目を向けさせることができた。さらに筆者の考えを読み取らせるために、「白い部分と黒い部分ではどちらが大切ですか。」と発問を行った。その後、筆者の考えに気付き、確実な読み取りにつながった。

（2） 視写を取り入れた学習の工夫

本時では、「白い部分」と「黒い部分」で示された抽象的な図と文章を関係させて読み取らせるという意図で、段落を視写させた。その後、「黒い部分」、「白い部分」は何を表しているのかを読み取らせ、筆者の主張に気付かせようとした。

児童の姿

第５段落の視写を行ったことで、「黒い部分」はテレビカメラが切り取る部分。「白い部分」は、「黒い部分よりもはるかに大きく、その存在を忘れがちになる。」という叙述を見つけることができていた。

その後、第４段落に書かれてある言葉の分類を行った際、ほとんどの児童が読み取った叙述を根拠に、積極的に話合い活動をすることができた。

第１回　検証授業の成果と課題

〔成果〕○　まとめの前に、ゆさぶる発問をすることで、より深く、確実な読み取りにつながった。

○　視写活動によって、普段は読み流してしまう箇所を意識させることができた。

〔課題〕●　児童生徒の視写活動での教師のかかわり（留意点）を整理する。

第２回　検証授業　中学校　第１学年「作品を読み解く」
教材名「少年の日の思い出」　　授業者　西中学校　教諭　矢野　善隆

（１）　叙述に目を向けさせる発問の工夫

教材文の冒頭部分の挿し絵の配色に着目させたうえで、情景描写の叙述を根拠にして、物語の展開を予想させた。

生徒の姿

挿し絵のもとになった情景描写の叙述をヒントに他の情景描写にも目を向けることができていた。

（２）　視写を取り入れた学習の工夫

教材文の冒頭部分の視写活動によって、情景描写に表れた登場人物の心情や物語の展開を読み解かせた。

生徒の姿

視写活動をすることで情景描写に着目できた。そして、物語の展開を個人思考で予想し、その後のグループ活動での話合い活動において、活発な意見交換ができていた。

第２回　検証授業の成果と課題

［成果］○　挿し絵の配色と情景描写を関連させた発問を工夫したことで、物語の展開の根拠となる叙述の読み取りにつながった。

○　視写活動によって、情景描写から登場人物の心情を把握しやすくなり、物語の展開を予想できた。

［課題］●　読解の根拠となる叙述をより的確に読み取らせるための例示や補助発問を準備しておく。

●　一単位時間における視写の時間配分に無理がないように、生徒の視写速度に配慮した工夫をする。

Ⅳ　算数・数学科教育研究班研究の実際

1　理論的な研究の実際

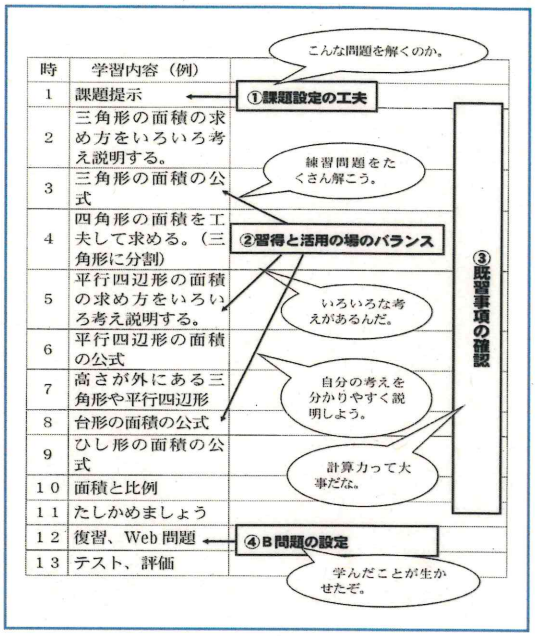
研究内容１　単元計画の工夫について

(1) 単元導入における課題設定

児童生徒の学ぶ意欲を高めるためには、知的好奇心を高めるとともに、学習の必要感がもてるような適切な課題との出合いを設定する必要がある。一人一人ができるようになりたいという気持ちをもつことで、単元を通して学ぶ意欲をもち続け、知識・技能の習得と活用力を育成することにつながると考えた。

(2) 習得と活用の場のバランス

知識・技能の習得と活用力を育成するためには、数多くの練習問題を解く時間や話合いの時間の確保、活用する場の設定など、習得と活用の場をバランスよく設定する必要がある。



【単元構成4つの手立て「第5学年面積の例」】

知識・技能を習得するためには、繰り返し練習する場が欠かせない。また、児童生徒は、授業において、数学的な見方・考え方にもとづいて、言語（数や式表現を含めて）を用いて表現している。言語を用いた、意欲的に自分の考えを伝え合う活動を意図的に設定することは、多様な考え方にふれるとともに、自らの考えを整理することであり、数学的な見方・考え方を高めることにつながる。

さらに、習得したことや高まった数学的な見方・考え方を活用する場を設定することで、学習への満足感、必要感を感じることになる。

(3) 系統性に基づく既習事項の確認

式は正しくても割り算で計算ミスをする等、既習事項が未定着で、つまずく場合がある。そこで、単元の学習内容の系統性から既習事項を確認し、それを毎時間の導入に小テストで取り上げることにした。学習内容によっては既習事項の確認が授業時間に設定できない場合、学力向上の時間や家庭学習と連携し、指導する。

(4) 活用問題に取り組む時間の設定について

活用力を育成するためには、生活場面を設定し、知識・技能を活用して解く問題に触れる機会を設け、学んだことが役に立ったり、実生活に関係があったりすることを実感させることが大切である。そこで、単元終末においてWeb 問題や過年度の全国学力調査等を解く時間を位置付けるようにした。

研究内容２　学習指導過程の工夫

(1) 見通しの在り方

算数・数学科の授業においては、「ア　活動の見通し」、「イ　解決方法の見通し」、「ウ　答えの見通し」等が考えられる。

見通しをもたせる意義は、以下のとおりである。

ア　活動の見通しがあると主体的な活動が期待できる。
イ　課題によっては、解決方法の見通しがヒントになる場合がある。見通しを与えすぎると、教師側がレールを敷きすぎてしまい、児童生徒の多様な考えを妨げる授業展開になる恐れがある。
ウ　答えの見通しをもっておくと、答えが出たときに明らかな間違い（小数点のミス、演算決定のミス等）に気付くことができる。

本時で考えさせたいことや誤答を生かして深めさせたいことなどを教材研究の段階で明確にし、どのような見通しをもたせればよいかを考え、授業を構成することが大切である。

(2) 話合いの場の設定

ア　図や絵、言葉と式の関連を図った表現活動及び話合いの場

算数・数学科では問題解決を図る場面においては、図や絵、式、表、グラフ、言葉等を使って、事象を数学的に表現できることが重要である。数学的な表現は考察対象を一般的に表すとともに、その特徴を簡潔・明瞭に表すことができる。

そこで、本研究においては、問題解決を図る手段として、式やグラフ等を活用することのよさに気付く児童生徒の育成を目指す。そのために、事象を数学的に表現する活動を積極的に取り入れることで、そのよさに気付かせたい。例えば、比例の関係にある２つの数量をｘとｙの式に表すことで、ｘがどんな値をとっても、すぐにｙの値が求められるようにするといったことである。

また、本研究では、話合いの場を設定し、自分が数学的に表現したことを、他の児童生徒に伝えたり、他の児童生徒が表現したことを知ったりする活動をとおして、より数学的な表現を深化・統合することができるのではないかと考えた。話合いの場では、自分の考えをもつことが重要である。そのため、前述したように日常の授業に数学的に表現する活動を積極的に取り入れ、望ましい表現力を身に付けさせたい。そのうえで、話合い活動を取り組むことを繰り返していけば、相互に高め合い、より理想的な問題解決を図っていけるのではないかと考えた。

イ　話型および発表方法

自分の考えを表現するために、「はじめに」「次に」「最後に」等、説明の順番を表す言葉を示した。自分の考えはもっているが、どのように説明したり文章に表現したりすればよいのか分からない児童生徒がいる。そこで、説明の順番を提示することで、論理的な説明の手助けになると考えた。

そして、発表を行う際は、紙やホワイトボードに話し合ったことや自分の考えを書かせて黒板に掲示した。言葉の説明に加え、視覚的に掲示することで、児童生徒は説明をより深く理解したり、自分の考えと比較したりすることができると考えた。

２　授業研究の実際

第１回　検証授業　小学校　６学年「比例と反比例」

授業者　高崎小学校　教諭　木幡　博史

(1) 単元計画の工夫

本単元「比例と反比例」の単元計画では、課題設定の工夫、習得と活用の場のバランス、系統性に基づく既習事項の確認を意識して構成した。

課題設定の工夫では、単元導入時に、過年度のＣＲＴを基にチャレンジ問題を作成し、児童に提示した。このチャレンジ問題を解決する時間を単元末に設定し、毎時間学んだことを活用して解決できることを目標とした。系統性に基づく既習事項の確認については、授業の始めに本時で扱う計算につながるものを「おぼえているかな」という項目で設定した。本単元では、整数・小数のかけ算や２つの数量に関する問題（表の穴埋め問題・立式）を行った。

児童の姿

単元末のチャレンジ問題については、１３名が正解（２１名中）、無答がなしという結果だった。グラフの分かっていることに印をつけることを指導したことで、問題を解く手順を見通すことができたのではないかと感じた。単元計画やチャレンジ問題を掲示したことで、チャレンジ問題を解いてみたいという意欲や本時の学習とチャレンジ問題とのつながりを意識しながら、主体的な学びにつながっていると感じた。

(2) 学習指導過程の工夫

本時では、「グラフから表、表から式をつくる。」という数学的活動を行った。特に、「見通しの段階」で解決の方法としてのグラフから表をつくることを提示した。自力解決の後、話合いの場を設定した。ペアで表をかき、解決した順番を言葉で書いて説明する活動を行わせた。

児童の姿

「見通しの段階」で、グラフから表を作成し、その表とグラフをもとにペアで問題解決の順番を書いた。「もう少し考える時間が欲しい。」というペアもあった。最後までできたペアは半分ほどだったが、発表を聞いて書き足したり、全体解決の場で式や表のよさについて考えたりする姿が見られた。

第１回　検証授業の成果と課題

［成果］○　単元導入段階でのチャレンジ問題の位置付けによって、単元を通して学ぶ意欲が高まり、多様な考えを引き出すことができた。

○　見通しの段階で数学的活動を焦点化することで、グラフや表、式のよさに気付かせることができた。

［課題］○　「見通しの段階」で、ヒントを与えすぎてしまい、多様な考えを出させることができなかった。実態に応じてよりよい考えを導かせる見通しの在り方を追究していく必要がある。

○　話合いの目的を拡散的思考なのか、収束的思考なのかを明らかにすることで、数学的活動の意義を児童が意識できるようにする必要がある。

第２回　検証授業　中学校第２学年「一次関数」

授業者　中郷中学校　教諭　谷山　裕亮

(1) 単元計画の工夫

「一次関数」の章末問題で取り扱う学習問題に、全国学力調査のＢ問題を活用した。ガソリン車と電気自動車を購入する際にかかる、車両価格と月々の充電代・ガソリン代の総費用を一次関数として捉える問題である。日常生活との関連から問題が出題されており、基本的な問題と、式とグラフの活用方法を説明する発展問題で設定されている。教科書では取り扱われていない内容であると同時に、式とグラフの良さを考えさせることができる問題であった。

生徒の姿

これまで問題を解く方法を説明するという機会がなかったこともあり、戸惑う生徒が多かった。しかし、机間指導やヒントカードを使うことで自分の考えをもつことができ、課題解決に向かうことができていた。

式の形式的なよさ、グラフの視覚的なよさに気付くことができていた。練習問題では、式やグラフそれぞれのよさを生かして問題を解く生徒もいた。

(2) 学習指導過程の工夫

個人思考、ペア活動を交互に行うことで、学習問題の解決に迫っていった。多様な考えを引き出すために個人思考の時間を十分に取ることにした。その後のペア活動は意図的に作ったペアのもと説明の方法について考えさせる活動を行った。

全体での説明の後は、自分の力でまとめ直しをする時間をとることで、本時に学習したことを確実に定着できるようにした。

生徒の姿

個人思考の時間を十分確保したことで、ペア活動に対する意欲が高まり、ペアでの話合いを充実したものにすることができた。

説明をまとめ直す時間では、それぞれが式のよさやグラフのよさを生かした説明をまとめることができていた。

第２回　検証授業の成果と課題

[成果]○　B問題を学習問題として取り扱ったが、問題提示の工夫によって、授業と日常生活との関連を実感させるとともに、生徒の問題解決意欲が高まった。

○　個人思考における自力解決の時間を十分に取ることで、ペア活動への意欲を高めることができた。

[課題]○　問題解決的な学習の流れにすることで、さらに生徒の問題を解く意欲を高めることができたと感じた。

○　まとめの際に最適解を出させたことで、話合い活動で出た多様な考えが埋もれてしまう場面があった。取り上げると考えが深まるものや誤答として紹介したいものを埋もれさせないための机間指導が必要であった。

Ⅴ　児童生徒の変容・感想

「国語科教育研究班」

○　視写活動の実践により、児童が「自分の考えを説明することが好きになった。」や「視写すると集中して文章の内容を理解することができるようになった。」等の声が聞かれ、視写の効果につながった。

○　発問後に、関係する段落を視写して考えさせることで、何となく自分の考えを発表していた児童が叙述にもとづいて考えを発表することができるようになった。

「算数・数学科教育研究班」

○　単元導入の工夫を行っていなかった年度当初と比べ、「先生、この問題、少し分かった気がします。」や「こんなふうに解けばいいんじゃない。」等のつぶやきが聞かれ、学習意欲の向上が感じられた。

○　学習指導過程の工夫（見通しの段階や話し合い活動など）により、自分の考えを分かりやすく説明しようとする児童が増えた。また、既習事項の振り返りの時間を確実に確保したことで、基礎・基本の定着につながった。

○　日常生活との関わりの深い問題を設定したことで、授業後、「今日のような問題は面白い。」「また、こんな問題解いてみたい。」といった感想を述べた生徒がおり、意欲的に学ぶ意欲につながった。

Ⅵ　成果と課題

成果	○　国語科教育研究班では、授業の中で発問と組み合わせて視写を行ったことにより、叙述に基づいた確かな読みができた児童生徒が多く見られた。 ○　国語科教育研究班では、理論研究に基づいた「視写ワークシート集」を作成し、市内小・中学校に配付することで、文法学習を視写の視点で整理することができ、活用できた。 ○　算数・数学科教育研究班では、基礎・基本の習得と活用のバランスを目指す単元構成を考え、授業に役立てることができた。 ○　算数・数学科教育研究班では、多様な考えに触れ、自分の考えをまとめるためには、見通しと話合い活動の関連や数学的活動の設定が大切であることが明らかになった。
課題	●　国語科教育研究班では、より意欲的な読解力・記述力の向上につながるように、より正確で深い読み取りができる発問計画にもとづいた視写の活動を適切に位置付ける。また、「視写ワークシート集」を活用する中で、工夫改善していく必要がある。 ●　算数・数学科教育研究班では、児童生徒一人一人が学ぶ意欲をもち続けることができるように、単元及び毎時間の導入において、身近な生活との関わりをもたせられるような課題設定の在り方を考える必要がある。

□　引用・参考文献

小学校・中学校学習指導要領平成２９年告示　解説国語編　　文部科学省 2017

青木幹勇授業技術集成（2）書きながら読む　青木幹勇　明治図書　　1976

国語力を高める音読と視写のシンプル授業　　吉永幸司　小学館　　2017

小学校・中学校学習指導要領平成２９年告示　解説算数編　　文部科学省 2017

小学校・中学校学習指導要領平成２９年告示　解説数学編　　文部科学省 2017

平成 30 年度全国学力学習状況調査　算数・数学

平成 26 年宮崎大学附属小学校研究公開　常葉大学　黒澤教授講演資料

□　研究同人

都城市教育研究所所長	吉川　勉	都城市立上長飯小学校	中武　幹
都城市教育研究所アドバイザー	黒木　哲徳	都城市立沖水小学校	関　裕章
都城市教育研究所アドバイザー	趙　雪梅	都城市立明和小学校	宮﨑　卓也
都城市教育研究所次長	深江　祐史	都城市立高城小学校	井上　岳
都城市教育研究所主事	大迫　拓也	都城市立高崎小学校	木幡　博史
都城市教育研究所主事	兒玉　直樹	都城市立姫城中学校	加祥　耕之輔
都城市教育研究所主事	馬原　祐介	都城市立中郷中学校	谷山　裕亮
都城市教育研究所主事	細山田　修	都城市立西中学校	矢野　善隆
都城市教育研究所主事	新垣　智規	都城市立山田中学校	桑原　勇樹
都城市教育研究所主事	北村　義人	都城市立白雲小・中学校	石川　浪子
都城市教育研究所主事	桑田　尚明		
都城市教育研究所庶務	篠塚　藍		